

2023. 12. 17. 主日礼拝説教
聖書： マタイによる福音書 7章24~29節
『家と土台』

「家と土台」の小標題が掲げられます。この本日の箇所をもって、マタイは5章から始めた「山上の説教」を終えようとしています。つまり本日の記事が総括として記されてゆくのです。

このたとえ話には他の箇所と同様、二つのタイプの人々が登場します。一つはイエスの言葉を聞いてそれを実践する者です。もう一つのタイプは、聞くには聞くがそれを守ろうとしない者です。どちらもイエスの言葉を「聞く」ということにおいて初代教会内の人々であることは分かるのですが、教会に属しているということが即ち救いに至るということではないというのです。そうではなく、聞いて「行ふ」者となることが決定的に重要であると説くのです。

総括的なポイントは次の四つです。

- 1, 「わたしのこれらの言葉」(24,26)とは「山上の説教」全体を指します。それは律法をしのぐ愛の教え、詳しく言えば隣人愛の教えなのです。
- 2, 1,の「これらの言葉」に続く「行ふ」(24,26)とは神の意志の表現、つまりイエスは神に代わって語ったのであると結論づけます。
- 3, しかし「これらの言葉」は聞くだけでは救いを保証するものではないと言及します。
- 4, この「家と土台」のたとえ話はノアの箱船(創世記 6-9章)をベースにイメージされています。ですから、ここに記されるのは洪水の再来であり、最後の審判のことなのです。「その倒れ方がひどかった」(27)とは救うことが出来なかったことを意味します。この終末意識から人はそれぞれの現在の生を見直すべきであると記したのです。

こうしてマタイは「山上の説教」を終末に備える不可分な教えと行いであると解釈したのです。

そして、28-29節で長かった「山上の説教」が「イエスがこれらの言葉を語り終えられると…」という定型句で締めくくられます。ここでマタイはもう一度群衆

に言及し、導入部(5;1)の場面に帰り、「山上の説教」とは何だったかを振り返ります。それは「権威」という言葉に表現される「責任」の問題でした。もちろん当時の律法学者も民衆から見れば「権威」をもって語ったのでしょう。しかし彼らの権威とは律法という潜在権威なのです。文字通り、虎の威を借る狐の如く権威を乱発したに過ぎないのです。これに対してイエスは自らの言葉を律法に対峙させ、むしろそれらを凌駕して行くのです。

わたしたちは、思い通りに生きられないと何かしら不満を募らせて、そのために実際以上に人生を重いものにしていくらいがあります。嫌なことをされると腹を立てて仕返しをしてやろうと思います。立場が逆になると、相手も同じことを考えるでしょう。しかし、だからといって報い合いの構造から脱しようともせず、その循環の中を生きることを当然とするのは、人生を卑しめることでもあります。むしろ報い合いの構造から離れて、相手や自分の感情に押し流されずに、自由な立場を求めて生きたいものです。

そういう人生を本来あるべき重さにまで軽くしてくれるのが信仰です。信仰とは、報い合いの構造の中にあって自らと向き合い、それらから自由になることなのです。イエスは「家と土台」にこだわり、不満に揺れ動くわたしたちに問い直す言葉を発せられるのです。その言葉を聞き、行うところに言葉は受肉し、福音となるのです。